

## 2025-2026 フィンドレー大学・福井県奨学生月例報告書 2月

作成者：伊藤桜羽

作成日：2026年3月7日

日本では立春を過ぎ、暦の上では春の訪れを意識する季節となりました。ここオハイオ州でも、先月のようなマイナス10度を下回る極端な冷え込みの日は少しずつ減り、冬の終わりが微かに近づいていることを予感させます。興味深いのは、自分自身の身体的な感覚の変化です。日本にいた頃は、気温が0度を下回るだけで耐えがたい寒さを感じていましたが、今ではマイナス5度程度であれば「今日は比較的過ごしやすい」とさえ感じるようになりました。過酷な環境に身を置く中で、自身の感覚が現地に適応していく過程を肌で実感しており、こうした適応能力の向上も、異文化環境という「非日常」を「日常」へと変えていく留学の醍醐味であると感じています。

この環境への慣れとともに、心境も「環境への適応」から一歩踏み出し、今月は「主体的な発信と交流」をテーマに過ごした活動内容をご報告いたします。

### 【学習面】

学業においては、講義形式の学びに加え、学外での実践的なアウトプットに注力しました。特に印象深い活動は、Communicative Practicesの授業の一環として、地域の公共図書館(Public Library)で実施した、家族連れを対象とした日本文化紹介イベントです。計2回の開催を、企画段階から当日の運営まで日本人留学生である私たちが自ら主体となって担いました。

1回目は、埼玉県川口市のアートプロジェクトである「ワタリドリプロジェクト」に関連し、メッセージを託すワタリドリの制作ワークショップを行いました。また、バレンタインが近かったこともあり、折り紙のハート作りも併せ、日本の手仕事の楽しさを伝えました。2回目には「トントン相撲」を導入し、折り紙で力士を作る工程から、日本語で名前や自分の趣味を平仮名・カタカナ・漢字で書いてもらう体験を提供しました。「山折り・谷折り」といった折り紙特有の動作を、英語で噛み砕いて説明することには非常に苦労しましたが、実際に手本を見せながら「Fold it toward you (自分の方に折って)」といった具体的なジェスチャーを交えることで、言語の壁を越えたコミュニケーションが可能であることを学びました。

また、美術館(MAZZA MUSEUM)での「Funday Sunday」にも継続して参加しました。今月のテーマは「ジャングル」だったため、魚を折るワークショップを担当しましたが、回を重ねるごとに英語での指示出しが円滑になり、地域社会の教育活動に直接貢献できているという手応えを深めています。



また、今月の学習面において最も意義深かったのは、2月21日の「国際母語の日 (International Mother Language Day)」を記念して開催された、大規模な学内イベントの企画・運営に携わったことです。

この「国際母語の日」は、1952年にバングラデシュで起こった、母語であるベンガル語を公用語として認めるよう求めた学生たちの運動が起源となっています。自らのアイデンティティの根幹である母語を守るために犠牲になった人々を追悼し、ユネスコが言語的多様性と多言語教育の重要性を訴えるために制定した、きわめて重厚な人道的メッセージを持つ記念日です。

私は今回のイベントにおいて、私を含めた日本人学生2名、そして他国から来た留学生2名の計4名による実行委員の一員として、イベント全体の主催・運営に深く関わりました。当日の式典は、フィンドレー市長の Christina Muryn 氏や、学术界を代表する Dr. Chris Denecker 氏といった、地域のリーダーたちが列席し、祝辞を述べるという、非常に格式高い場となりました。市長の言葉からは、オハイオの地域社会においても、多様な言語を話す住民が共生することの重要性が説かれ、大学がその多様性の拠点であるという強い期待を感じ、主催者の一人として身の引き締まる思いがしました。

プログラムは多国籍な熱気に溢れ、ラオ語や日本語によるキリスト教の祈りに始まり、ネパール、インド、韓国、イタリア、台湾の学生たちによる歌の披露、ベトナムやトルコの学生による叙情的な詩の朗読などが次々に行われました。

日本からの出し物も非常に充実しており、伝統的な和太鼓の迫力ある演奏や、HIP-HOP、J-POP に合わせたダンス、けん玉の披露、さらには日本の食と言葉を繋ぐおにぎりの配布など、多角的に自国文化を発信しました。特に印象的だったのは、現地の学生たちが日本のアイドルダンスを全力で披露した場面です。現代のポップカルチャーが言語の壁を軽やかに飛び越え、異なるルーツを持つ人々を一つにする瞬間を目の当たりにし、深い感動を覚えました。

市長や大学関係者が見守る中、多様な言語の響きを肌で感じることで、言語とは単なる伝達手段ではなく、個人の魂や歴史そのものであると強く再認識しました。他者の母語を尊重することは、その人の尊厳を守ることと同じであるという、社会学の根幹に関わる深い気づきを得ることができました。



### 【生活面】

今月の生活で非常に印象深く、自分の考え方を大きく変えるきっかけになったのは、キャンパス内でひととき目立つ存在のアメリカンフットボール部（以下、アメフト部）の学生たちとの交流です。

彼らは非常に体格が良く、集団で固まって行動していることが多いため、正直に言えば最初は近寄りがたく、威圧感さえ覚えてしまう存在でした。それでも持ち前の好奇心から、「あんなにストイックに打ち込んでいる人たちは、普段どんな生活をしているのだろう？」という興味もずっと抱いていました。そんな時、学食で一人の学生が、授業で習っている日本語について質問してくれたことをきっかけに、アメフト部の子たちと話す機会が増えました。それまでは、彼らが片言の日本語で「こんにちは」と声をかけてくる様子に対し、「からかわれているのではないか」という不安や、コミュニケーションの意図が掴めないもどかしさを感じることもありました。しかし、共に食事を囲み、対話を重ねる中で、彼らが日本という国に深い関心を持ち、誠実に歩み寄ろうとしてくれていることが理解でき、私の中にあった心の壁は次第に解けていきました。

何より嬉しかったのは、彼らが日本の食べ物やアニメに対して非常に強い興味を抱いてくれていたことです。学食では、「NARUTO と ONE PIECE のどちらが最高の作品か」などというテーマで熱い論争が巻き起こるほどで、彼らにとって日本文化が身近でポジティブな存在であることを知り、日本人として誇らしい気持ちになりました。

また、彼らとの対話を通して、アメリカの大学スポーツを統括する NCAA（全米大学体育協会）の仕組みについても深く学びました。NCAA には 3 つのディビジョンがありますが、これは大学の意思だけで決まるものではなく、「提供するスポーツの種目数」「各スポーツに割り当てる奨学金の総額」「学生数や財源規模」「試合会場の収容人数（D1 のみ）」といった、組織運営上の厳しい基準を満たしているかどうかで区分されています。

- ・ディビジョン 1 (D1)： 男女各 7 種目以上の競技を保持し、大規模なスポーツ奨学金予算を持つ「アスリート養成・興行」の最高峰。
- ・ディビジョン 3 (D3)： 男女各 5~6 種目以上を保持するが、スポーツ推薦による奨学金が「一切禁止」されており、学業とアマチュア精神を最優先とする。

・ディビジョン 2 (D2)： 本学が所属する区分で、男女各 5 種目以上を保持しつつ、スポーツ奨学金制度も維持する。D1 のような商業的規模ではなく、地域社会との繋がりや「アスリートとしての成長と学位取得の両立 (Life in the Balance)」を組織の理念として掲げている。

この区分では、競技の実力に応じたフルスカラーシップが認められる一方で、学生アスリートとしての GPA 維持が義務付けられています。学費や食費、高額な教科書代まですべてを実力で勝ち取っているエリート学生であっても、基準の成績を下回れば即座に試合出場資格を失うというプレッシャーの中で日々を過ごしています。才能に甘んじることなく、自分を厳しく律して「文武両道」を体現しようとする彼らの真摯な姿を知り、今ではアスリートとして、そして一人の学生として心から尊敬しています。

ただ、仲良くなる過程で、アフリカ系アメリカ人の友人から「日本人は自分たちのようなルーツを持つ人々に対して、否定的な先入観を抱いているというのは本当か？」という、非常に切実な問いを投げかけられる場面がありました。親睦を深めたいと願っていた矢先に、そのような根深い問題に触れる質問を受け、その言葉に私は深い悲しみを覚えるとともに、世界に根深く残るステレオタイプの弊害を突きつけられた思いがしました。外面だけで判断されているのではないかという彼らの不安を知り、私は「決してそうではないこと、一人の人間として向き合いたいこと」を誠実に伝えました。今では人種や国籍という枠組みを超え、対等な友人として笑い合える関係を築けており、自らコミュニティの中に飛び込み、対話を試みることの重要性について身をもって学びました。

アメリカが熱狂するスポーツ文化を体感する機会も多くありました。特に、車で片道 2 時間をかけて Canton に応援に向かった水泳の Great Midwest Athletic Conference では、フィンドレー大学水泳部の圧倒的な実力と、会場が揺れるような熱気に圧倒されました。男女共に 4×50m リレーでの優勝をはじめ、多くの選手がメダルを手にする姿を間近で見ることができ、同じ大学の一員として誇らしい気持ちになりました。また、学内の巨大スクリーンで Super Bowl を観戦し、Bad Bunny によるハーフタイムショーを楽しみながら現地学生と共に熱狂する時間は、まさにアメリカならではのダイナミズムを感じる経験でした。



2月の大きなイベントと言えばバレンタインデーですが、アメリカでは男性から女性へ花束やプレゼントを贈るのが一般的です。その中で私は日本人の友人と共に、日頃お世話になっている人たちに感謝を伝えるため、クッキーとブラウニーを手作りしました。日本には本命だけでなく、「友チョコ」「義理チョコ」という独自の文化があることを紹介しました。さらに、日本の伝統行事である「節分」にちなみ、現地の友人たちと「恵方巻」の文化を楽しみました。全員で同じ方向を向いて黙々と食べ続けるという、傍から見れば少しシュールな光景に、最後は耐えきれず笑いが漏れてしまいましたが、沈黙の中で願いを込めるという日本の精神性の一端を共有できる良い時間になりました。また、友人たちに誘われアイススケートやインドアゴルフにも挑戦しました。苦手意識のあったスケートでは、友人たちの献身的な支えにより、最終的には壁に頼らず自力で滑ることができるようになりました。未知の経験に対し、勇気を持って一歩踏み出し、周囲の助けを借りることで苦手を克服できるという経験は、留学生活全体に通じる大きな自信となりました。



他にも、福井県立大学看護学部から来学した4名の学生と、今学期から日本語を学び始めた現地学生との交流を深めるため、私が主体となってスポーツ交流イベントを企画しました。ピククルボールやバスケットボールを通じて、初対面の学生同士が打ち解ける場を作ることができ、企画者として大きな達成感を得ました。

健康管理の面では、最近寝不足が続いていたり、怠惰な生活を送ってしまっていたりするように感じたので、週末の早朝に気合を入れて、雪の中を往復1時間かけてカフェに行きました。静寂の中を歩き、カフェに集まる人々の活気に触れることで、心身ともに引き締まる思いがしています。また、高カロリーな食事による影響を考慮し、ジムでのトレーニングも一日二回取り入れるなど、習慣化しました。



今月の活動を振り返ると、伝統行事やスポーツ制度といった目に見える文化の理解だけでなく、人種や先入観といった心の深部にある問題に一步踏み込めた一か月であったと感じています。異なる文化を持つ者同士が真に理解し合うためには、表面的な知識だけでなく、勇気をもって心を開き、対話を重ね続けることが不可欠であると身をもって学びました。留学生活も残り約三か月となり、終わりが少しずつ見えてきました。慣れからくる慢心に注意しつつ、残された一日一日を全力で駆け抜けたと思います。

本報告書についてご質問、お問い合わせ等ございましたら、以下のメールアドレスまでご連絡ください。

itos1@findlay.edu